

コレッジ・ド・フランスおよび ESPCI に留学して

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科

複合領域科学専攻 石野千恵子

2005年8月30日の朝。ラッシュアワーで他の人の迷惑にならないようにと気を使いつつ、二時間以上かけて成田空港へ到着しました。そして、チェックインを終え、出国をし、出発ゲートに向かって移動していると何やらにぎやかな機体が。

ゲートの番号と航空会社を考えるともしや…と思いながらゲートに着きました。そして搭乗予定の機体を見たところ、そこには数々のポケモンの姿が。そう、この日の成田 - パリ便はポケモンジェットだったのです。少々驚きながら座席に座り窓の外を眺めると、翼にはなんとピカチュウが！ポケモンも見守っているし、無事パリに到着するだろうという安心感と共に出発することになりました。



研究は CNRS の研究ディレクターである David Quere 博士の下で行いました。

研究室のメンバーです。左から 3 番目が David Quere 博士です。

鉛直にたらししたティッシュを水の張った水槽に接させると、水が紙に浸透して上昇し、浸透の高さと時間がべき乗則となっていることが知られています。



ESPCI での実験室です。...  
実はここ、地下です！

そこで、紙の代わりに規則的なミクロンオーダーの凹凸を持つ表面を使い、液体と接させた場合の浸透の高さと時間の関係を調べました。その結果、浸透の高さと時間がべき乗則となっていることが分かりました。

研究室での一番大きな出来事は何と言っても研究室の引越でした。当初はコレッジ・ド・フランスにいたのですが、諸事情からグループで ESPCI へ引越しました。5 区内での引越だったので移動距離そのものは短かったものの、(当たり前ですが) 荷造りは必要で、何かお手伝い

しないと気がすまない日本人根性(?)が出て、ビーカーなどを梱包材(いわゆるプチプチ)で包んでいました。私は普通に包んでいるつもりだったのですが、フランスの学生には、「そんなに丁寧に包まなくてもいいのに」と言われ、彼らが梱包したのを見ると、梱包材をぐるぐる巻きにしてガムテープでとめたものだったので、むしろ私はその大雑把さにびっくりしました。このような部分で日本人とフランス人の性格の違いを感じました。

他には日本の研究室とフランスの研究室とでライフスタイルの違いを感じました。日本では理論の研究室ということもあり、いつ来てもそして遅くまで居座っても自由だったの

ですが、フランスでは、比較的早く来て早く帰る人が多いなと感じました。そして、研究室にいる時間の割には業績もあるので、効率の良さにも驚きました。

パリでは Cite Internationale Universitaire de Paris のハインリッヒ・ハイネ館 (=ドイツ館) に住んでいました。が、なかなか大変でした。まず、シャワーとトイレが男女共用ということに驚きました。そして、シャワーのヘッドは固定されており、水の向きを変えるにはヘッドを動かさないといけないのですが、私の身長ではヘッドまで手が届かず、いつもジャンプして動かしていました。こればかりは辛かったです。

さらには生まれて初めての1人暮らしをフランスで行い、ご飯を鍋で炊いたり、おかずを作ったりということもしました。ハイネ館には冷凍庫がなかったので、冷凍庫のある生活がどれだけ便利なものかを知りました。そして、自宅生活がいかに楽かということがよく分かりました。

とはいえ、観光旅行とは異なる感覚で町を見ることができました。観光でいくときはまずチェックすることのない美術館の企画展を見ることが出来て、大変面白かったです。ポンピドゥーセンターの企画展を見に行ったときに、1時間以上待つやっとなることが出来ましたが、待っている間にフランス人も行列でおとなしく待てるということを知って驚きました。

フランスで一番印象に残っていること、それは日本では絶対知り合うことのないような人たちと知り合えたことです。中でも、日本から博士課程で留学してきた文系の方々といろいろな話をして、理系の人は研究を「仕事」と割り切れますが、文系の人は研究にその人の生き様というか考え方が表れるといった、文系と理系の研究に対する考え方の違いなどを知りました。その点でも大変貴重な経験になりました。

最後に、このような機会を作ってください、支援して下さった日仏理工科会や諸先生方に感謝いたします。ありがとうございました。